

# 那須与一伝承館通信〈第5回〉

## ○お殿様が描いた軍器図

今回は那須与一伝承館が収蔵する資料の中から、軍器図を紹介し  
ます。

軍器図は、江戸時代中期の那須家当主である那須資明（一七六〇—一八三二）が、寛政九年（一七九七）に自ら筆をとり、那須家に伝わった家宝を極彩色で描いた絵巻です。

その出来栄えのよさ、資料的価値の高さから、国の重要文化財に指定されています。資明はこれ他にも多くの絵を描いており、本職の絵師顔負けの活躍ぶりでした。

さて、絵巻には、「源頼朝朝臣白旗」、「那須与一宗隆太刀」、「胴丸（兜・袖）」、「陣羽織」、「持小旗」、「宇都宮俊綱旗」の計6点の宝物が描かれています。

そのうち、頼朝白旗、与一太刀およびその袴、持小旗について



軍器図(胴丸)

は、現在も那須家資料の中に残されています。

また、写真はかつて那須家が所蔵していた縹糸威（緘）胴丸を描いた部分です。縹糸威とは、露草の花で染めた紐のことで、この威が全体に鮮やかな水色を醸し出し、大変美しい甲冑となっています。

なお、この胴丸、兜および大袖は、現在、京都国立博物館に所蔵されて、国の重要文化財に指定されています。

それでは、なぜ資明はこのような絵巻を描いたのでしょうか。その理由として、資明は後世のために那須家の宝物を記録しておこうとしたからではないかと考えられます。今のように、写真やコピーが無かった時代、あるものを記録するためには、全く同じものを作るか、そのものを「描く」という方法しかありませんでした。

資明は、丹念に宝物を観察して、克明に描き、記録を残していたのです。このような資明の努力があったからこそ、現在、私たちは那須家の宝物を見ることができ  
るのです。

### ■問い合わせ

那須与一伝承館 ☎(20)0220

## 彫刻

### 市内で作られた作品とその作者

## 周遊 11

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介し  
ます。

ふれあいの丘の芝生広場にある彫刻群の中の1つで、最も東側にあるものです。

長方形の石の枠の中に、アーチ形をした橋のように石が組みま  
れています。その部分をよく観察して



**Mind Forest**  
一石の霊という森を食べた年—  
用澤 修 (京都府) 1997年

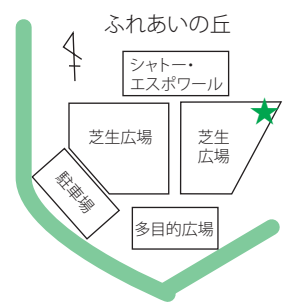
見ると、その中にまた小さなアーチがあつて、その中にさらにまた小さなアーチが組み込まれていることがわかります。作者は「全体は部分の中に存在」しているということ意識して、その極めて小さな部分であつても、宇宙のように極めて規模の大きなところまで影響を及ぼしているのではないかという思いを作品を通じて伝えています。



用澤 修氏

作者の用澤修氏は、1955年東京都に生まれ兵庫県育ち、阪神淡路大震災後は京都府在住。これまで関西各地で開催された彫刻シンポジウムなどに参加して活躍。現在はNPO森林・環境ネットワークを立ち上げて、森づくりや森を活用したイベントの開催などに取り組んでいます。

### 設置場所案内図(★印)



### ■問い合わせ

文化振興課文化振興係 ☎(23)8718